

## 平安貴族の「見初め」とする結婚事例

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5859">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/5859</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 平安貴族の「見初め」とする結婚事例

倉 田 実

はじめに

平安貴族の求愛・求婚の作法は、懸想文を贈ることから始められていた。懸想文は何度も贈られることが普通であったが、特に初度のものは「言ひ初め」として記憶されていた。<sup>①</sup>この場合は、それ以前から「思ひ初め」「恋ひ初め」をしたことを訴えることが多かった。

懸想文を贈る段階から一歩進むと、次は女の家に男が訪問し、求婚の意向を懇願する場合もあった。訪問客がまず家者に挨拶するのは、寢殿か対の屋の妻戸前の簀子になる。<sup>②</sup>そこに初めて座って、訪問の意向、すなわち求婚の意思を伝えることを「居初め」としていた。<sup>③</sup>これを女側から捉えれば「来初め」となる。この場合は、正式な婚姻関係を結ぶためであり、親の許諾を得ることもあった。そして、婚約が決まると結婚当日になっていた。

婚姻関係や愛人関係において、初めて契りを交わすこと、すなわち結婚や逢瀬が成立したことも記憶されるべき記念日であった。『古今六帖』では「初めて逢ふ」が立頂されている。そして、このことを指す言い方は、実に多様にあった。例

えば、「逢坂の関」を越えたとすれば、それは逢瀬があったことになる。また、「川を渡る」「下紐を解く」「床を払う」なども逢瀬を持つ意味になる。さらに、「逢ふ」「見る」「通ふ」「契る」「結ぶ」などの語だけでも、初めての契り、初めての逢瀬の意を表すことができた。

この小稿では、これら多様な言い方のうち、「…初め」という形の用語を検討してみたい。一部を挙げれば、「見初め」「逢ひ初め」「通ひ初め」「おはし初め」「結び初め」「帰り初め」などといった形である。これらの用語は、初めて契りを交わす意でも使用されるのであり、こうした多様な言い方があるということは、語としてのそれなりの住み分けがあった。また、歌語として使用されるものもあった。こうした様態を整理することで、「言ひ初め」「居初め」と続いた求愛が、結婚を意味する多様な「…初め」で一段落する次第を確認することになる。男女関係の成立までに、一連の「…初め」は記念日として記憶されているのである。なお、表題に「見初め」だけを示したのは、後に触れるように最も一般的に使用されたからである。

以下、使用する本文は、散文が新編日本古典文学全集、ただし『狭衣物語』は新潮日本古典集成、和歌が『新編国歌大観』により、表記は私に改めた場合もある。

### 一 多様な「…初め」とその差異

愛情関係成立を示す多様な「…初め」の用語があり、どの形を使用するかは恣意的なようである。先に触れたように、それなりの住み分けが認められる。ちなみに、多様な恋愛遍歴を示す『一条摂政御集』では、「…初め」以外も含めて、次のような言い方で初めての契りであることを示していた。

㊦ おなじ女に、いかなる折にかありけむ (四)

① 男、まかり初めて、またえまからで（二二七）

② 平大納言の女におはし初めて（五九）

③ 逢ひたまた後に、野内侍の許籠りおはして、内裏に内裏にとあるに、北の方（六六）

④ 本院の侍従の君のもとにおはし初めて、暁に、時鳥の頃にや（一一五）

⑤ まだ逢ひ初めたまはで年経たまたりけるに、せちに待ちて許いたまたりける（一一七）

⑥ ⑦は既に注意されているように、結婚を言う婉曲的な表現で、例えば『蜻蛉日記』で兼家と結ばれたことを「などいふまめ文、通ひ通ひて、いかなる朝にかありけむ」（上巻・九三頁）と記されたのと同類になる。⑧はこれ以前からの展開で、「逢ふ」だけで愛人関係が成立したことを示していた。⑨「許い」は「逢ひ初め」を許した意である。これ以外に「まかり初め」「おはし初め」の二例の「…初め」が使用されている。初めての契りであることをどう示すかの文脈上の要請によって、これらが適宜選択使用されているよう。

①は「まかり初めて、またえまからで」というように、両様の「まかる」事態を示したのである。②③の「おはし初め」は、男への敬意を高めるためであり、「逢ひ初め」は、逢瀬そのものを言うためであったと見られる。恣意的な使用のようだが、文脈上で、なぜその形が使用されたかは理解できることになる。しかし、『一条撰政御集』内部のこの多様な有り方は、一作品としてみると特異なのかもしれない。ここに私家集としての、自撰・他撰・増補・再編などの編纂事情が絡んでいると思われる。

それでは、改めて初めての契りを意味する多様な「…初め」を確認しておきたい。その住み分けの様子が明確になるようにグループピングして示すと次のようになるだろうか。

A 見る系Ⅱ「見初め」「見え初め」「御覧じ初め」「見たてまつり初め」「逢ひ見初め」

B 逢う系Ⅱ「逢ひ初め」

C 通う系Ⅱ「通ひ初め」「まかり初め」

D 行くの敬語系Ⅱ「おはし初め」「おはしまし初め」「参り初め」

E 結ぶ系Ⅱ「結び初め」「契り初め」「寝初め」

F 帰る系Ⅱ「帰り初め」

やや多岐になったが、概要を記しておきたい。個別的な検討は次節以降になる。これらの差異は、「見る」「逢ふ」「通ふ」「行く」「結ぶ」などの語で、結婚する、契りを結ぶ意になる場合があることによっている。それに応じて多様なのである。A「見る系」では、「見る」主体となる男に敬意が入ると「御覧じ初め」に、女を高めると「見たてまつり初め」形になる。敬意が男女どちらに向かうかによって、形が変わるのである。両者に敬意が入ると、後に扱う「見初めたてまつりたまひ」という形が取られる。「逢ひ見初め」は、B「逢う系」と重なるが、ここは、「逢ひ初め」の形しかないようである。C「通う系」は、男が女の家に通うことから言う場合で、平安貴族社会の婚姻形態が妻問婚（通い婚）であることに拠っている。通うことを丁寧と言えば、「まかり初め」になる。丁寧語と尊敬語を区別して、前者となるこの「まかり初め」は便宜C「通う系」に入れた。D「行くの敬語系」の「行く」も「通う」と同じことだが、この場合は尊敬語である。A「見る系」の「御覧じ初め」と同じく男に敬意が入るのが前二者「おはし初め」「おはしまし初め」で、女を高めるのが「参り初め」になる。ただし、入内・入宮の場合は男女が逆になる。E「結ぶ系」は文字通りのことで、「契り系」としてもいいが、「契り初め」の用例は少ないので、このようにした。また、便宜ここに「寝初め」を入れた。F「帰る系」も妻問婚に拠っており、男が早朝に女の家から帰ることから言う場合である。

これら用語のほとんどは、女に敬意が入ったにしても、男を主体とする言い方になっている。婚姻形態が男性優位になっていることの反映であり、結婚を指す言葉にもジェンダー構造が見てとれる。女を主体とするのは、A「見る系」の「見え初め」くらいである。B「逢う系」とE「結ぶ系」は男女共用となるが、これとて捨える用例のほとんどは男が主体と

なっている。

それでは、それぞれの概要はこれくらいにして、以下、右の系列ごとに、各種の言い方を整理確認していきたい。

### 三 A「見る系」の散文使用

最初のA「見る系」は、見るで結婚・契りを指すことからする例である。「…初め」の形に限って言えば、この意味でも一般的に使用されたのが、『一条摂政御集』には認められない「見初め」であった。ここではまず、この語を中心として散文の用例を確認したい。

『源氏物語』は男女関係の成立を「見初め」で示していた。十五例中十三例がこの例であり、三例ほど示せば次のようにある。

① 頭中将なんまだ少将にもしたまひし時、見初めたてまつらせたまひて、三年ばかりは心ざしあるさまに通ひたまひしを、(夕顔卷・一八五頁)

② 殿の御心おきてを見るに、見初めたまひてん人を、御心とは忘れたまふまじきにこそ、いと頼もしけれ。(少女卷・六六頁)

③ 大将の母君を、幼かりしほどに見初めて、やむごとなくえ避らぬ筋には思ひしを、(若菜下卷・二〇八頁)

①は夕顔の死後、侍女の右近が光源氏にその素姓を明かす段で、頭中将との馴れ初めを言っている。ここは敬語が下接する例で、「たてまつらせたまひ」は、侍女の立場によって夕顔と頭中将の両者を高めている。②は惟光が、舞姫になった娘あての夕霧の文を見る段で、光源氏は見初めた人を忘れなかったという心掟から夕霧の懸想を喜んでいる。ここも敬語が下接している。③は女楽後の女性評を光源氏が紫上に語る段で、葵上が最初の妻であることを言っている。紫上に遠慮

して、葵上には敬意を入れていないことになろう。

いずれにしても、頭中将が少将時代に夕顔と関係したこと、光源氏が契りを交わした愛人たちを見捨てないこと、葵上を初めて妻としたことなどが、それぞれ「見初め」で回想されている。「見る」ことは逢瀬を持つことであり、初めてだと「見初め」になるのである。

『狭衣物語』も事情は同じである。狭衣が関係した四人の女性のうちの三人に対して、回想する場合も含めて初めての契りを「見初め」、及びその敬語形「見たてまつり初め」を基本として語っていた。また、〈逢はざる恋〉に終わった源氏宮との場合でも、結ばれることを狭衣が仮想する際に「見初め」が使用されている。

④ 飛鳥井君||いかなりける契りにか、はかなく見初め聞こえて後は、見捨てむことのおはれにおぼえたまふを、さらばいかがおぼすべき。(巻一・七六頁)

⑤ 飛鳥井君||我が時々も御覧じ初めしほどよりのことどもは、いま少し目のみとまらせたまひて、(巻四・三二二頁)

⑥ 女二宮||見たてまつり初めし夜の有様よりうち始め、あさまじうはかなかりける契りのほどは、我が御心にだに思ひ過ぐしがたきを、(巻二・一九四頁)

⑦ 一品宮||宮に参り初めたまひては、このおはし所もわざともなきさまにもてなしきこえたまひて、(巻二・一九九頁)

⑧ 源氏宮||我がものにひき忍びとり隠しきこえて、ひたすら深き山里などにもてさすらはむも、あるかひなかるべし。さりとして、親たちのおほし寄らぬ有様にて、ほのかに見たてまつり初めても、なかなかなる心まじひは、いやまさりにこそはあらめ。(巻二・二三〇頁)

⑨ 宮姫君||見たてまつり初めしよりこそは、この世を捨てがたきものと思ひなりにしか。(巻四・三三二頁)

④は狭衣が飛鳥井君に見初めた時以来の愛情を訴える言葉の一部で、当夜のことは「思はずなりける契り」(巻一・六五

頁」とされていた。「契り初め」で初めての契りを言うことはまだなかったので「見初め」が使用されるのである。飛鳥井君との経緯は狭衣即位後にも残された絵日記から回想され、その折は⑤にあるように「御覧じ初め」の尊敬語になっている。即位の前後で狭衣への待遇を変えているのである。⑥は女二宮の出家を知った狭衣の心内で、密通によつた見初め以来の関係が内省されている。引例中の「あさまじうはかなかりける契り」もその折のことを含み、同じく当夜では「のがれがたき契り」(巻二・一四二頁)とあった。⑦は一品宮との場合で、ここはその身分に応じて敬意が入り「参り初め」になっている。⑧は先に示したように源氏宮と一緒にすることを仮想するもの。従兄妹関係で、義妹になる源氏宮に敬意が入っており、強い思慕の情をかかえる狭衣の内面が反映している。⑨は宮姫君との場合の回想である。宮姫君とは契る以前に添寝だけで終わった段階があつて、その折には、初めての出会いを言う「かばかりまで見たてまつり初めて」(巻四・二五五頁)とあった。したがつて⑨には、その折も含意されているかもしれない。

『狭衣物語』でも「見初め」が基本としてあり、「見たてまつり初め」が使用されるなど、敬意の入れかたに『源氏物語』との差異があつた。すなわち、女性に敬意が入る「参り初め」と「見たてまつり初め」があり、後者の女二宮との場合は密通での関係になるので、「参り初め」にはならないことになる。

この他では、『とりかへばや』が「見初め」と「見え初め」を併用している。

⑩ 人より先に見初めたまひてしかば、おろかならず思ひきこえたまふに、(巻一・一六五頁)

⑪ いかにも、女は見え初めぬる人に忘らるる音聞きばかりいみじきことなし。(巻三・四〇六頁)

⑩は冒頭部分で、主人公たちの母親のうち、源の宰相女に対する語りで、最初の妻であることを言っている。⑪は今大将から四君に贈られた文を、父右大臣が見ての感想部分である。女は初めて契りを交わした男に忘れられて立てられた評判ほど辛いものはないとしている。ここに「見え初め」の例があり、「見初めつる人」という言い方になっていない。これは、女側から言うことになるので「見え初め」の形が使用されるのである。「見初め」は男を主体とする用語であつた。



以上のように夫婦関係・愛人関係の成立を示す最も一般的に使用される「：初め」の形は、A「見る系」であり、「見初め」の形を基本として、その敬語形が派生していたことになる。そして、「見初め」は歌語としても使用されていた。なお、これらの中で「見え初め」が女を主体とするものであったことは、注意されよう。

#### 四 歌語としての「見初め」

歌語としての「見初め」も、初めて契りを交わす意のほかに、人や物と初めて出会った意でも『万葉集』以来、平安時代を通じて使用されている。問題にしている平安時代の用例としては、次のようなものがある。

- ⑫ 名取川瀬々の埋れ木あらはれば如何にせむとか逢ひ見初めけむ（古今集・恋三・六五〇）
- ⑬ 見初めずてあらましものを唐衣たつ名のみして着るよなきかな（後撰集・恋一・五三九）
- ⑭ 思ひ絶え侘びにしものをなかなかに何にすべなく逢ひ見初めけん（古今六帖・四・恋・二〇〇四・大伴家持）
- ⑮ 言ひ知らぬこひは君こそ持たりけれ見初めしよりぞかくは焦がるる（重家朝臣家歌合・一一九）
- ⑯ 思ひ初め見初めざりけんいにしへを恋ふにさへこそかなはざりけれ（林葉和歌集・恋歌・七一九）
- いずれの例も初めて契りを交わした意である。⑫の初句「名取川」は、名を取るということから、「無き名を取る」「噂になる」の意を働かせ、また、当地の景物の「埋れ木」が導かれる歌枕である。その早い例がこの歌になる。ここは「逢ひ見初め」の形になっている。「名取川の浅瀬浅瀬の埋れ木が現れるように、二人の仲があらわになってしまったら、どのようにしようとするつもりで逢い見初めてしまったのであろうか」とするもので、秘めた関係で初めて契りを交わしてしまった事情を詠んでいる。契りを交わせば、思いは募り、「忍ぶ恋」ではいられなくなるのを危惧しているのである。

次の⑬は「逢ひて逢はざる恋」の趣向であろう。和歌の場合は、「見初め」に「染め」が掛けられることもあり、ここは

その例になる。歌は、「衣を染めるように、逢い始めなければよかつたのに。唐衣を裁つではないが、立つのは噂ばかりで、衣を着る夜も男女の仲もないことだ」となる。結句の「着るよなきかな」の「よ」は世と夜の掛詞で、これで「逢はざる」ことを言っている。片桐洋一校注『後撰和歌集』（新日本古典文学大系、一九九〇・四）は、「見そめずて」に対して、「そむ」は「…になつてゆく」の意。「見」は男女が顔を見合うこと。深い仲になること」としているが、やはり初めて契りを交わす意を汲み取るべきである。また、「見」は男が女を見る意である。なお、この歌は初句「見初めずも」の形で西本願寺本『伊勢集』に収載されているが、男の立場に立つた歌なので、伊勢の歌ではないことになる。『後撰集』がよみ人知らずとしているのに従うべきであろう。

⑭は『万葉集』巻四・旧七五〇番歌の異伝歌である。『古今六帖』の形では、「思いを絶つて侘びしくしてきたものを、かえつてどうして何のつもりもなく逢い見初めてしまったのであるか」としている。契りを交わしたが故にかえつて恋の苦しみがまさり、それ以前の侘びしさのほうがまさりだと言うのである。「逢い見初め」は、⑫ともども逢つて初めて契りをおかしたことを強調していよう。

⑮は「恋ひ」に「火」を掛けて、結句の「焦がる」を導くのが趣向である。「言い表しようもわからない恋の火は、あなたのほうで持っていたのです、見初めてから、こんなにもわたしは恋い焦がれているのですから」となる。見初めて恋の火を移されたというのである。

⑯は「思ひ初め」があつて、「見初め」があるという段階を示している。「見初めてしまったが、思い初めていなかった昔を恋しく思つても、それはかなわなないことであつたのだ」としている。⑭と事情は違うものの「見初め」で変わったのである。

「見初め」を使用した歌を見てみた。いずれも男を主体として、初めて契りを交わした後に歴然と変化した恋の思いや、苦しみを詠んでいた。こうした「見初め」の詠み方が、情愛表現の型の一つであつたと言えよう。このように「見初め」

は散文と和歌に併用される一般的な用語なのである。

## 五 B 「逢う系」

B「逢う系」は、「逢ひ初め」だけであり、逢う意を働かせる用法だが「見初め」とは違って、偏った使用のされ方が認められる。初出は、一節で引用した『一条摂政御集』になるが、しばらくはそれほど使用されることはなかった。しかし、『詞花集』以降に歌語として定着している。「見初め」にはなかった歌語としての用法が見出されたのである。すなわち、「逢ひ初め」を「藍染め」と掛詞にする用法である。染め物は色褪せるので、その意の「返る」を「帰る」と掛けたり、その産地となる播磨国の歌枕「飾磨」に関連させて詠まれるようになっていく。そのために、飾磨といえは、「逢ひ初め」と「藍染め」を掛けて詠むようになっていた。また、筑前国の歌枕「藍染川」と掛詞にすることもあった。

- (1) 逢ひ初めて<sup>レ</sup>またも逢ひはべらざりける女につかはしける（後拾遺集・恋三・七一八・叡覚法師）
  - (2) 恋ひ恋ひて君にはじめて逢ひ初めのかへる色とは今朝こそは知れ（頼政集・四六九）
  - (3) 逢ひ初めて後ぞあやしき恋衣かへるに色のまさるべしやは（月詣和歌集・恋下・五六九・顕昭）
  - (4) 我が恋は逢ひ初めてこそまさりけれ飾磨の褐の色ならねども（詞花集・恋下・二三四・藤原道経）  
頼まず飾磨の褐の色を見よ逢ひ初めてこそ深くなるなれ（長秋詠草・五〇九）
  - (5) なき名こそ飾磨の市にたちにつれまだ逢ひ初めぬ恋するものを（山家集・一二四二）
  - (6) 人心かねて知りせば中に逢ひ初め川も渡らざらまし（堀河百首・一二一三・隆源）
  - (7) あだ人に逢ひ初め川を渡らずは心尽くして思ひせましや（統詞花集・恋中・五八六・斎院帥）
- (1)は詞書での使用であり、ここは「逢ひて逢はぬ恋」であることを示している。散文使用の場合はこの他の用例も含め

て「藍染め」と掛詞にはなっていない。(2)以降は、いずれも「逢ひ初め」に「藍染め」が掛けられている。

(2)は「後朝の心」を詠んだもので、「恋い慕つて君に初めて逢ひ初めをして帰ると、涙によつて、藍染めが褪せた色になつて」と今朝になつて知つたことだ」の意になる。「かへる」が後朝に「帰る」と藍染めの色が褪せる「返る」の掛詞になつてゐる。褪せるのは後朝の別れの悲しさに流す涙のせいである。(3)は、「逢ひ初めをした後は不思議なことであるよ、帰ろうとすると恋心がまさるのに、衣が褪せて色がまさるはずがないので」となるうか。共に「かへる」の掛詞が趣向になつてゐる。

(4)からは(6)は歌枕「飾磨」を詠み込んでいる。飾磨の地は濃い藍色の褐染めが名物とされていたので、藍染めや褐色が共に詠まれている。「飾磨」と言えば、「藍染め」と「逢ひ初め」の掛詞を使用するのが定石であつた例である。(4)は「わたしの恋は逢ひ初めをして恋心が増したことだ、藍染めの飾磨の褐色ではないけれど」としている。褐は色が濃いのである。(5)は「初遇恋」の題詠で、「わたしが頼りにならないというのなら、飾磨の褐の色をご覧なさい、藍染めで深い色になるように、あなたと逢ひ初めをして深い愛情になるものですよ」となる。(6)は「飾磨の市」の用法で、「あらぬ評判が、飾磨に市が立つように、たつてしまつたことだ、飾磨の藍染めではないが、まだ逢ひ初めをするまでもない恋をしてゐるのに」の意となる。「飾磨の市」であつても「藍染め」が響くのである。

(7)と(8)は歌枕「藍染川」を詠む例である。「藍染川」は染川とも言い、早くに『伊勢物語』六一段で「染川を渡らむ人のいかでかは色になるてふことのなからむ」と詠まれていた。「染川」なので、渡る人は「色になる」とするのであり、「逢ひ初め・藍染め」の元となつていよう。(7)は「遇不逢恋」の題詠で、「人の心を以前に知っていたならば、かえつて藍染め川を渡つて、逢ひ初めをすることもなかつたのに」となる。『堀河百首』の「遇不逢恋」は、すべて女の立場で詠まれてゐるようなので、この「人」は男になり、「逢ひ初め」のあと、変心し、逢瀬がなくなつたのである。その後悔を女の立場で詠んだことになる。(8)は、「浮気な人に、藍染め川を渡つて、逢ひ初めをしなかつたならば、心を尽くす思いをしたことで

あろうか」となり、これも逢ひ初めを後悔する意になっている。「尽くし」は「筑紫」を掛けている。

「逢ひ初め」は、詞書などでの散文使用を除くと、多く「藍染め」と重なるように詠まれた歌語なのであった。ここに語としての存在意義があったのである。

## 六 C 「通う系」

平安貴族社会は妻問婚なので、初めての契りは、多く女の家に通うことで交わされていた。したがって、男を主体とする「通ひ初め」も初めての契りを意味していた。また、丁寧語で示す「まかり初め」とすることもあった。次節で扱うD「行くの敬語系」とともに散文で使用され、平安時代には、初めての契りを言う歌語として使用されることはなかった。用例を見て行きたい。

「通ひ初め」は、和歌の詞書にわずかに認めることができる。

- ㊦ 実範朝臣の娘の許に通ひ初めての朝につかはしける（後拾遺集・恋二・六六五・源頼綱）
- ㊧ 中関白通ひ初め侍りける頃（新古今集・恋三・一一四九・儀同三司母）
- ㊨ 女親王に通ひ初めて、朝につかはしける（新古今集・恋三・一一七七・源清蔭）
- ㊩ ㊦は共に「朝」とあるので後朝の歌であることを示している。㊧の和歌では「帰り初む」が使用されているが、これはF「帰る系」で触れる。㊨は「頃」とあるので新婚時代となるが、「今日は」はその当日となろう。「通ひ初め」の用例は、平安期の私家集には見られず、右の勅撰集のみとなる。しかし、『物語二百番歌合』や『風葉和歌集』などでは、物語に使用されていなくても、男女関係成立を「通ひ初め」で示して、歌を配置している。

㊩ 宇治に通ひ初めたまひし頃、女君もろともに眺めたまひし暁、（物語二百番歌合・九）

㊦ 一条の女三の皇女に通ひ初めての朝に（風葉和歌集・九一〇）  
両者とも後朝の歌との理解である。和歌の詞書において、初めて契りを交わすことを示す語として、「通ひ初め」が使用されているのである。

しかし、勅撰集では丁寧語となる「まかり初め」の方がふさわしいことになろう。

㊧ 女の許にまかり初めて、朝に（後撰集・恋六・一〇三九・藤原蔭基）

㊨ 女の許にまかり初めて（拾遺集・恋二・七二三・大江為基）

㊩ 平行親朝臣の女の許にまかり初めて、またの朝によめる（後拾遺集・恋二・六六七・藤原隆方）

㊪ 人の許にまかり初めて、朝につかはしける（新古今集・恋三・一一五二・藤原頼忠）

だいたい八代集の時代を通じて、詞書で使用されたのは「まかり初め」であった。多く、後朝の歌の説明になるのも、「通ひ初め」と同じであった。

## 七 D 「行くの敬語系」

D 「行くの敬語系」の「おはし初め」「おはしまし初め」「参り初め」も、和歌での使用がない。前二者は、男への敬意を込めた用例であり、『一条撰政御集』にもあり、また『夜の寢覚』にも使用されているが、歴史語りで多く目につく語である。『夜の寢覚』と『栄花物語』から引用したい。なお、「行き初め」の用例は認められない。また、『大鏡』には「…初め」の用例はない。

㊫ その夜になりて、おはし初めぬ。（夜の寢覚・卷一・五五頁）

㊬ 例の宮たちは、我が里におはし初むることこそ常のことなれ、（第一・月の宴卷・三七頁）

③ あるべきほどに目安くしたてておはし初めさせたまふ。(第四・見果てぬ夢巻・二〇六頁)

④ この御あたりにおはし初めて後は、(第八・初花巻・四五九頁)

「おはし初め」の用例になる。①だけが『夜の寝覚』で、男主人公関白左大臣男権中納言が源氏太政大臣家の大君のもとに通いはじめたことである。この婚姻は太政大臣家からの縁談話がまとまった結果なので、婿を「おはし初め」で高めているのであろう。

② 以下が『栄花物語』正編からである。②は普通の親王たちは、女の里に通いはじめるのが通例だとするもの。しかし、為平親王の場合は、内裏に住んでいたので、源高明女は参内して、帝后に「嫁扱ひ」されたと続いている。③は藤原道兼が養女昭平親王女のもとに公任を通い初めさせたとするもので、道兼に対して「たまふ」の敬語が使用されている。④は、藤原頼宗が、伊周女大姫君の許に通いはじめたとするもの。いずれも正編の用例であったが、続編になるとこの形ではなく、より敬意の高い「おはしし初め」が使用されていく。

⑤ よろづいみじう今めかしうておはしし初めさせたまつりつ。(第二七・衣の珠巻・六七頁)

⑥ 大将殿おはしし初めける春、(第三五・くもの振舞巻・三二四頁)

⑦ まことや右の大殿は、つひに殿の齋宮におはしし初めぬ。(第三六・根合巻・三七五頁)

⑧ はまだ正編で、三条院女禊子内親王を小一条院が養女のように後見して、藤原道長男教通を通わせはじめ申したとするもの。「おはしし初め」になっているのは、「たてまつる」の下接と相俟って内親王であることを高めようとしたからかもしれない。

続編の⑥は、藤原頼通男通房が、同じく頼通養子源師房女の許に通いはじめたこと、⑦は藤原教通が、禊子内親王死後に、前齋宮で具平親王女嬬子女王の許に通いはじめたことである。「殿の齋宮」とされる「殿」は頼通で、嬬子女王は妻隆姫の妹にあたる縁で後見していたのであろう。ここから養女であることを導くのは危険である。<sup>6)</sup>

『栄花物語』で「おはし初め」「おはしまし初め」の対象となった人物を見渡してみると、続編の通房と師房女の関係が、一番身分関係が低い。それなのに敬意の高い「おはしまし初め」が使用されている。⑤の例は特殊とすると、これは、やはり正編と続編の作者の違い、語りの違いによっていると思われる。続編は、同時代にかかわるのでより高い敬意が使用されたのである。

男ではなく女側に敬意を込めると「参り初め」の形になる。すでに『狭衣物語』の一品宮と狭衣に用例があったことを示した。この他には、『栄花物語』に用例が見られるが、この場合は『狭衣物語』とは違い、男を高めている。

④ 参り初めさせたまへりし折などは、(第二六・楚王の夢巻・五一八)  
道長女嬉子が、東宮敦良親王に入宮した折を回想している例である。天皇・東宮に対しては、女を低めて「参り初め」が使用されるのであり、他の人物との違いに注意が必要である。

## 八 E 「結ぶ系」

E 「結ぶ系」としたのは、「結び初め」「契り初め」「寝初め」である。先に触れたように、「契り初め」の用例は少なく、「寝初め」をここに入れたのは便宜の措置である。いずれも歌語使用である。前二者の主体は男女どちらでも可能のはずだが、次の(一)のように女を主体とするものは少ない。「結び初め」から見て行きたい。

「結び初め」は、露・氷・草木などが結ぶとする例のほうが多く、羈旅歌にもなるが、恋歌で初めての契りを言う場合も認められる。

- (一) 何せむに結び初めけん岩代の松は久しき物と知る知る(拾遺集・恋二・七四二)
- (二) 武蔵野に我が標結びし若草を結び初めつと人や知るらん(堀河百首・一一七五・藤原仲実)



(三) 人知れず結び初めてし若草の花の盛りも過ぎやしぬらん（千載集・恋四・八八八・藤原隆信）

(四) 六月を待てと契りし若草を結び初めぬと聞くはまことか（建礼門院右京大夫集・一五六）

(一)は初めて契りを結ぶ意での早い例である。詞書に「ある男の、松を結びてつかはしたりければ」とあり、女の初めての契りを後悔する歌である。「どうして初めての契りを結んでしまったのであろう、岩代の松が久しいように、人の訪れを待つのは久しいものとよくよく知りながら」となる。背景には幸運や長寿を祈念する「結び松」の呪術があるが、「松」が「待つ」と掛詞になり、それが「久しき」ということで愛情の薄さが言われて、「契り初め」が悔やまれたのである。待つ恋の苦しみを詠んだ女歌となる。

(二)は、「初遇恋」の題詠で、『伊勢物語』四九段の「うら若み寝よげに見ゆる若草を人の結ばむことをしぞ思ふ」を本歌にしていよう。「武蔵野にわたしが自分の物だとしるしておいた若草のような乙女と、契りを初めて結んだことを人は知っているだろうか」となる。

(三)は詞書に「絶久恋といへる心をよめる」とあり、これも題詠である。『井蛙抄』以来、右の『伊勢物語』四九段の歌と、『源氏物語』の「見し折のつゆ忘れぬ朝顔の花の盛りは過ぎやしぬらん」（朝顔卷・四七六頁）の二首が本歌とされているが、(二)の歌のほうが直截的に響いていると思われる。(二)の「若草を結び初めつと人や知るらん」を受けて、「人知れず結び初めてし若草」としていると思なせよう。(二)での契りを(三)では過去のものとし、さらに「花の盛りも過ぎやしぬらん」と現在までの時の経過を言うのである。(二)を本歌と見ること、契りを初めて交わした乙女が、別れた後、盛りを過ぎるまでになったという物語のように仕立てられていると思われる。まさに「絶久恋」なのである。ここを片野達郎・松野陽一校注『千載和歌集』（新日本古典文学大系、一九九三・四）は、「むすびそめてし」に対して、「恋心を抱いた」としているが、これではこの恋題にもふさわしくなからう。また、上條彰次校注『千載和歌集』（和泉書院、一九九四・一一）ともども(二)を本歌とする指摘はない。

(三)の歌の趣向は成功して、「若草」と「結び初め」の結びつきが流行したようである。詠者藤原隆信と交渉のあった建礼門院右京大夫の(四)は、この歌を意識している。また、措辞としては(二)と近い。

この(四)には、「人の女を言ふ人に、五月過ぎてと契りけるを、心焦られして、忍びて入りにけりと聞く人の許へ、人に代はりて」とあり、詠歌事情が分かる。結婚を忌む五月を過ぎてから結婚するとの約束を待ち切れずに女の許に忍び込んでしまった男に対して、その女の親に代わって詠んだ歌となる。「六月になるまで待ちなさいと約束した若草と契りを結んでしまったと聞いたことは真実ですか」と難詰しているのである。

万葉の時代以来の結び松の呪術は受け継がれてきたが、結ぶを契る意に、松を若草に転化して「結び初め」はさらに新たな歌語として再生したことになる。

続いて「契り初め」である。この形は、初めてそのように取りきめたという意で使用されることのほうが多いが、少ないながらも初めての契りを交わす意も認められる。

(五) 万代を契り初めつるしるしにはかつがつ今日の暮ぞ久しき(千載集・恋三・七九七・後白河院)

(六) 今日こそは思ふ心の身を知るに同じ縁えんにとも契り初めつれ(壬三集・一一〇二)

(五)には「位の御時、皇太后宮はじめて参りたまへりける後の、朝につかはしける」との詞書があり、後白河天皇に藤原公能女忻子が、久寿二年(一一五五)一〇月二〇日に入内した折の後朝の歌である。「契り」は両様にかかっており、「万代を契り」で偕老同穴の約束を交わした意が働き、「契り初め」で初めて契りを交わした意になっている。「行く久しく共にいようと誓って初めて契りを交わしたその証拠として、早くも今日の夕暮れまでが久しく思われることだ」ということになる。

(六)は「初恋」の題詠である。やや分かりにくいのが、「今日こそはあなたを思う心のある我が身を知ることになったので、同じ縁を結ぶようにと約束し、初めて契りを交わしたことだ」となるうか。いずれも「契り」に約束する意を重ねており、

こうすることが「契り初め」の使われ方になる。

次は「寝初め」の例である。

(七) 杉板もて葺ける板間のあはざらば如何せんとか我が寝初めけん（拾遺集・恋二・七四六）

(八) 隠れ沼の下行く水の思ほえば如何にせよとか我が寝初めけん（古今六帖・三・沼・一六八六）

(九) 言の葉は色やは見ゆるは濃紫深き心は寝初めてぞ知る（兼盛集・二五）

(七)は『万葉集』巻一一・旧二六五〇の異伝歌である。『拾遺集』の形では、「杉板でもって屋根を葺いた、その板の隙間が合わなくなるように、逢えなくなつたらどうするつもりで私は共寝して契りを交わしたのであるか」となる。「逢ひて逢はざる恋」になることも考えずに逢ってしまったのであろうかと回顧しているのである。

(八)は、(七)の下の句とほぼ同じなので類想歌となる。「隠れ沼の下を流れ行く水のように、忍びの関係になることを思ったならば、どのようにするつもりで私は共寝して契りを交わしたのであろうか」となるか。こちらは「忍ぶる恋」の趣向となる。

(九)は、「色」「濃紫」などあるので、「初め」は「染め」に掛けられている。詞書に「いみじう恨むれば、時々は聞こゆる折もあるはと女の言ふに」とあり、男が女をひどく恨み、時々はその恨みごとが聞こえてくる折もあることですよと女が言つて寄こしたので、男が返した歌となる。「恨めしく思うわたしの言の葉に、愛情の色が見えることがありますよ」か、濃紫の色が深く染められているように、私の深い心はあなたと寝初めをしてこそ分かるのですよ」と逢瀬を願うのである。高橋正治『兼盛集注釈』（貴重本刊行会、一九九三・六）は「そめ」に対して、「初め、染め」、前と違った状態となつて、それがいつまでもつづく意」としているが、初めて契りを交わす意も含めて考えるべきであろう。

「寝初め」の歌は、このほかにあまり見られない。万葉的な直截表現であるせいも、10世紀半ば頃で、その使用は姿を消したのだと思われる。

## 九 F 「帰る系」

最後のF「帰る系」は、「帰り初め」だけであり、後朝の歌か後朝の別れの歌に使用される形である。

- (a) いにしへの人さへ今朝は辛きかな明くれればなどか帰り初めけん（後拾遺集・恋二・六六五・源頼綱）
- (b) 我ばかり思ふ心はありきやと帰り初めけん人に問はばや（月詣和歌集・恋下・五六六・藤原良清）
- (c) 明けぬとて帰り初めけむいにしへに代はる例を今朝は残さむ（拾玉集・一〇七八）

(d) 今の間の我が身に限る鳥の音を誰憂きものと帰り初めけん（拾遺愚草・一四六一）

(a)には「実範朝臣のむすめの許に通ひ初めての朝につかはしける」との詞書がある。「昔の人でさえ後朝の別れをする今朝は辛く思われます、その昔の人は、夜が明けるとどうして帰り初めをするようにしたのでしょいか」となる。「帰り初め」は、帰ることを始めた意が表に立つが、初めて後朝の別れをして帰る意が重なっていると思われる。「帰り初め」の用例は、だいたいこのようになっている。

(b)には「後朝恋の心をよめる」との詞書がある。「わたしほどあなたを思う心があつたのかと、帰り初めを始めた人に問いたいものだ」となる。(c)は「後朝恋」の題詠である。「夜が明けたということでも帰り初めを始めた昔に代わる例を今朝は残したいことです」となる。(d)も「後朝恋」の題詠で、「今の間の我が身だけに限られて聞こえる鳥の鳴き声を、誰がいやなものとして帰り初めを始めたのであろうか」となる。

後朝にかかわる「帰り初め」は、だいたいこのような詠みぶりであり、昔、朝に帰りはじめた人のことを問題にするようになっていく。しかし、そこに初めて後朝の別れをして帰る意が重ねられているのである。

おわりに

以上、初めて契りを交わす意になる多様な「∴初め」の形を見て来た。これほど多様な言い方があったのは、そもそも男を主体とした男女関係成立を言う多くの語彙があつたからである。そして、この多様な「∴初め」は、散文使用か和歌使用か、あるいは併用かの差異があり、さらに「逢ひ初め」「帰り初め」のように用法上の特徴があつたのである。

これらの用例を確認したことで、「思ひ初め」「恋ひ初め」から「言ひ初め」になり、さらに「居初め」「来初め」をして、「見初め」に代表される形で、婚姻関係・愛人関係が成立したことを跡づけたことになる。

## 注

- (1) 拙稿「平安貴族の求婚事情―懸想文の「言ひ初め」という儀礼作法―」(小嶋菜温子・倉田実・服藤早苗編『王朝びとの生活誌』森話社、二〇一三・二三)
- (2) 拙稿「寝殿造の接客空間―王朝文学と簀子・廂の用―」(『古代文学研究 第二次』18、二〇〇九・一〇)
- (3) 拙著『蜻蛉日記の養女迎え』(新典社、二〇〇六・九)、拙稿「夕霧の落葉宮邸訪問の作法―吊問から求婚へ―」(『大妻国文』38、二〇〇七・三三)
- (4) 拙著『狭衣の恋』(翰林書房、一九九一・一一)
- (5) 滝沢貞夫『堀河院百首全釈下』(風間書房、二〇〇四・一一)
- (6) 拙著『王朝撰関期の養女たち』(翰林書房、二〇〇四・一一)